

## 4 インターンシップ

### 1) 政治経済学科、コミュニティ政策学科、欧米文化学科におけるインターンシップの状況

(C群:インターン・シップを導入している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性)

**【現状の説明】** インターンシップを導入しているのは政治経済学部2学科と欧米文化学科である。まず、政治経済学部2学科では、就労観や就職意識の醸成、企業が求める人材の把握、就職のミスマッチ解消のためインターンシップを導入し、春学期開講の「インターンシップⅠ(事前学習)」(2単位)を受講した上で、夏季休暇中に「インターンシップⅡ(実習)」(2単位)として、民間企業、行政、非営利団体(NPO、NGO)などでの実習を行うことによって、合計4単位を認定している。在学中に自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を積極的に積む機会を学生たちに提示し、講義科目等での学習を実践的に活かしたり反省したりしながら将来設計を練り直すように促している。事前学習は下記12回の講義からなり、実習を円滑に行えるようビジネスマナーを身につけるとともに、グループで行う模擬企画プロジェクトを通じて、討論、提案書作成、発表方法を修得することを目標としている。実業家など外部講師の講演も取り入れ、働くことの意味、仕事の進め方などを学ぶ。また、書く力をつけるために、「インターンシップに期待すること」「模擬企画プロジェクトに参加して」「実業家の講演を聴いて」「インターンシップを受講して」というテーマでレポートを合計4回書かせている。

第1講義	インターンシップの目的とその効果／職業観と職業意識を磨く
第2講義	職業観育成へのプログラム
第3講義	自己理解と対人能力向上プログラム
第4講義	ビジネス意識向上プログラム
第5・6講義	ビジネスマナー演習
第7～10講義	模擬企画プロジェクト
第11講義	実業家による講演
第12講義	インターンシップに向けての心構え(価値観・目的意識の明確化)

インターンシップは就職活動の準備の意味もあり、実習先は原則として学生が探す。実際には、埼玉県などのインターンシップ情報を活用するとともに、教員及びキャリアサポートセンター職員が個別に実習先を確保することもある。実習期間は2週間。実習中は、毎日、実習ノートを作成し、実習先担当者に提出し、コメントと押印を受ける。

実習終了後に、①実習ノート、出勤簿の確認、②実習先担当者の実習評価、③実習レポートの審査(A4サイズ横書きワープロ原稿(40文字×30行)4ページ程度)などが行われる。この審査に合格した者に「インターンシップⅡ(実習)」2単位を与える。また、インターンシップⅠ(事前学習)の単位認定を受けていない学生が、事前に実習計画書を提出した上で、上記の条件を満し、合格した場合には「インターンシップ(自主活動)」2単位を与えている。

この科目は他学部の学生にも開放しており、意欲的な学生が多数受講している。2006年度の受講生総数は55名であり、その内他学部からの受講生は18名である。

欧米文化学科では、児童英語教育に関するインターンシップが実施されている。本学科では、2004 年秋学期より小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）の登録団体として「小学校英語指導者認定資格」の取得が可能となり、そのためのカリキュラムの一環として「児童英語教育インターンシップⅠ」（必修科目 2 単位）および「児童英語教育インターンシップⅡ」（選択科目 2 単位）が設置されている。

これらのインターンシップはいずれも座学ではなく学外学習であり、学期中に 60 時間の実習を行っている。この実習に向けては、履修登録時にオリエンテーションを設け、事前に授業の内容を説明するとともに、質の高い英語指導者になるために小学校の教育現場で実習することの意義づけを理解させている。

実習先は、さいたま市内の公立小学校や公民館、及び東京都北区の小学校などであり、学生が自分の空き時間内に実習先を設定して、各学期中に 60 時間の実習を積み上げていくシステムである。各実習校では、教育委員会から派遣される外国人講師による授業の見学及びサポートを行い、実習生による授業研修も一定時間行われている。実習先の小学校の教育環境が一律ではなく、外国人講師の教育経験の差や、常時外国人講師が派遣されないなどの課題もあるが、全般的には実践的で有意義な実習が行われていると言える。

人間福祉学部の 2 学科では、資格取得に際して保育や介護の実習・施設実習での学外体験が行われているので、「インターンシップ」は導入していない。また日本文化学科では実施していない。

**【点検・評価】** インターンシップは、学生が社会に出て働く意味を考えさせる機会として積極的に活用されている。在学中に学生が実際の社会と向き合う貴重な機会であり、アルバイト慣れした学生にとっても、アルバイトとは異なる緊張感のある就業体験を経験することの意義は大きく、企業や議員事務所、ボランティア組織などでのインターンシップは人間的成長を促すものとして大きな成果を上げている。これは聖学院大学が掲げる【到達目標】④に該当する点で評価されるべきである。

他方で、学生は「インターンシップⅠ（事前学習）」の受講後に実習に出向くが、この制度についての受け入れ先の理解の度合いによってはその実習内容に差があることも浮かび上がってきた。参加学生の多くは、インターンシップ実習に概ね満足したと評価しているものの、途中で脱落する学生もあり、実習先の選定を含め本制度についての双方の事前認識と一層の相互理解が必要である。

欧米文化学科の児童英語教育インターンシップについては、実習先の受け入れ態勢の教育環境によって、特に小学校英語の導入への取り組み方や外国人講師の問題などで実習内容が左右されてしまう点が指摘される。こうした状況の中でも、インターンシップ参加者が、これまで主として本学科内の児童英語サークルの意欲的な学生が中心となっていることにも因り、実習先からは概ね高い評価を受けている。

**【課題・方策】** 政治経済学部の実習は、その実習の多くを夏休み期間中に行っている。そのために、どうしても学生と実習先との実際のやり取りの詳細については、実習終了後のレポートの提出を待たねばならない。今後、実習途中での脱落等のトラブルを解消するためにも、インターンシップに関わる大学の関係部署が実習先とより緊密に連絡が取れるようにすることで、本制度のよい成果が学生ならびに実習先双方に得られるように体制を整えることも必要である。

児童英語のインターンシップについては、今後、実習先の小学校における国際理解教育のあり方やその内容を事前に十分に調べると共に、大学からの移動時間をも考慮して、実習先を再検討する必要があると思われる。さらに、資格取得のためだけにインターンシップを履修する学生が増えてきた場合、実習先の担当者との信頼関係を損なわないように十分に指導して実習に参加させることが必須である。

## 5 ボランティア

### 1) 児童学科におけるボランティア活動

(C群: ボランティア活動を単位認定している学部・学科等における、そうしたシステムの実施の適切性)

**【現状の説明】** ボランティア活動を単位認定している学科は児童学科である。児童学科では学生の自主的なボランティア活動に対し、「フィールドワーク」という科目を設定し、内規に従って単位認定を行っている。

保育士資格、幼稚園教諭免許を取得できる本学科では、子どもの生活の場を学生自身が体験することが不可欠となる。そのために、授業としての実習以外に保育施設や児童福祉施設における自主的なボランティア活動を行い、保育や児童福祉の意味、また実際に直面する問題点等を現場体験から学ぶことを奨励している。

また 2006 年度からは、聖学院アトランタ国際学校幼稚部 (Seigakuin Atlanta International Schools) における海外ボランティア活動を単位認定すべく「海外実習 (SAINTS)」という科目が新設された。これは、卒業要件単位及び幼稚園教諭一種免許取得に必要な科目の単位を全て取得済みの4年次生を対象とした2週間の実習で、参加学生は現地での保育活動を手伝いながら、色々な人間が共に生きる国際舞台で、言葉や文化の違いを越えた共感を実感し「子ども」そのものに出会うという貴重な体験をしている。この実習は、秋学期に1度に3人ずつ2回実施され、応募者が多いときには選抜をして成績の良い学生を送り出していることもあり、参加学生の就職にも極めて有利であった。

他の学科では、授業科目に「NPO・NGO論 (国際協力)」（政治経済学科・人間福祉学科）、「ボランティア論」（コミュニティ政策学科・人間福祉学科）、「国際ボランティ